

「日本、もつと来て」
40年前に日本人が
残した「遺産」

田中 日本の援助や企業活動に対するイラク側からの期待は非常に高いと感じています。それは1970〜80年代に日本人が残してきた「遺産」のおかげだと感じます。

桑原 当時のイラクにはたくさん日本人の日本企業が入っていて、日本人の勤勉さや技術力、独自の文化風土に、イラクの人たちは感銘を受けたようです。今も、首相顧問会議のサーミル・アッバース・ガドバイン議長をはじめ、行く先々で「日本企業にもつとイラクに来てほしい」と言われます。日本への期待は高い。

天野 それを物語るのが、北部のクルクークでの例です。40年前、われわれは石油の精製に必要なコンプレッサーを導入し、その運転指導に日本人技術者を送っていました。と

日本企業の目

イラクのビジネス・ポテンシヤル

戦後の治安回復を受け、イラクでは一部の外国企業が投資を開始している。そんな中、日本企業はイラクにどのような可能性を感じ事業を展開しているのか。1950年代からこの国に進出してきた三菱商事株式会社で、80〜90年代にバグダッド駐在を経験した天野さんと、現在イラク・ビジネスの最前線に立つ桑原さんに話を聞いた。

ころが程なくして戦争が始まり、イラクから撤退。本来なら年に一度のメンテナンスが必要ですが、それもできなくなってしまった。でも驚くことに、今でも現地に行くところ「三菱のコンプレッサーは壊れていない」とほめられるんです。正直に言えばきちんとメンテナンスしてほしいところですが、結果的に日本製品に対する信頼につながっていいですね。

桑原 2009年4月、70年代にバスラに建設された三菱重工の肥料工場を訪れた時のことです。スペアパーツの供給も途絶えている状況でしたが、日本のモノづくりの精神が伝授され、工場のメンテナンスやカイゼンに努力を重ねているイラク人の技術者から、「重工のサトウさんはどうしている？」と個人名が挙がりました。どのサトウさんか指しているのか分かりませんが、彼らの記憶の中にはきちんと日

本人の姿が刻まれているのです。

天野 70年代に建設した三菱重工製のプラントは、実は大赤字でした。でも菌を食いつぶってどうにかやり逃げたらイラク側に評価され、次の仕事につながった。しかしこの仕事もオイルショックの影響などで厳しい状況に追い込まれてしまった。それでもまた乗り越えようと、さらに次の仕事につながっていったんです。逃げるに最後までやり遂げる。そういう日本人の姿をイラクの人たちはしっかり見ていた。それが今の日本への期待につながっているのではないのでしょうか。

古い友人と 随伴ガス開発に挑む

田中 戦争や経済制裁により国際社会との関係が断たれたことで、逆にイラク人の日本への良い印象が当時のまま冷凍保存されている気がします。その高い期待に応えて

いきたい。日本企業として、イラクでの今後のビジネスをどう考えているでしょうか。

桑原 ODAの勢いに十分対応できていない部分もあり、じくじたる思いでいます。治安も改善されてきたようですが、とは言え、イラク出張は会社の方針で最小限にとどめる必要があることも事実です。

天野 バグダッドの事務所は閉鎖してしまいましたが、何名かのイラク人スタッフには残って働いてもらっています。また、私と同じく最後のイラク駐在員だった日本人社員が隣国ヨルダンをベースに、日常的にイラクの関係者と顔を合わせています。細々と人とのつながりを保ち、種をまき続けている状況です。

桑原 こうした人脈を頼りに、また日本企業の力を結集して始まったのが、南部でのガス開発。これは、石油の生産過程で発生する随伴ガスを回収し、エネルギー化しようという事業です。

田中 随伴ガスは大気中に放出され無駄になっているばかりか、環境にも良くない。日本では原子力発電の問題もあって天然ガスへの注目が高まっています。その点からも随伴ガス開発はとても意義が高い。

桑原 その通りです。しかし、そう簡単に事業化できるわけではなく、78年製のプラントを改修して随伴ガスの処理量を増やせないか調査してみたり、石油メジャーの雄シエルと一緒にマスタープラン

を作成してみたりと、09年4月にJICAのミッションでイラク入りして以来、6度ほど現地に足を運び、試行錯誤しながらいろいろなおとに挑戦してきました。

天野 まさしく、その積み重ねが実を結んだのだと思います。

桑原 随伴ガスは、ガスといっても油分も含まれているので、2つを分離すると、油分はガソリンなどの原料に、ガスは発電燃料や肥料の原料となります。また、副産物として液化石油ガス(LPG)も製造できます。現プラントは老朽化に加えて戦禍のダメージもあり、全体の20〜30%ほどしか処理能力がありませんが、今後の石油産出量の増加を見込み、今回の事業では設計当初の3倍程度にまで上げていきたいと考えています。そのようにしてまずは電力、肥料、自動車ガソリン、家庭用LPGなどの国内需要を満たし、将来的には、液化天然ガス(LNG)やLPGの形態にして日本に輸入できるようにしたいと思っています。

イラクが自立する日 新たな日本との関係

田中 イラクは安全面で他国よりも配慮が必要ですが、各社ともビジネス展開の拡大を計画していると理解しています。やはりイラクに對して、大きな可能性を感じているからでしょうか。

桑原 もちろんです。原油の埋蔵量は世界有数。ポテンシヤルが高い

のは言うまでもありません。また、現場の技術者の高い能力と規律、そしてわれわれが持っている弁当箱に手を出さないイラクの子どもの礼儀正しさなどを垣間見て、この国に、そして人々に復興支援の手を差し伸べるべきだと強く感じました。JICAの理事長の緒方貞子さんが言われるように、「自分たちが必要としている国や人々がいればそこに行こう」という考えには、まったく同感です。

天野 私はイラクの文化レベルの高さにも可能性を感じています。駐在経験者は、イラクのことを悪く言いません。皆良い思い出となって今に至っています。理由を考えてみると、それは文化レベルが高いからだと思います。イラク人は個々の教育レベルが高く、モノの考え方もしっかりしている。当然、仕事上は意見の食い違いで言い合いになることもありますが、最後は握手を交わし、また一緒に次の仕事をやる。日本人とイラク人のメンタリティーは非常に近い、そう思うんです。

桑原 イラクも他の中東の国々と同じく、タフ・ネゴシエーター。でも、先の関係まで考え相手を尊重してくれるのがこの国の特徴です。だからつながりが薄れないと思うんです。問題は政治でしょう。閣僚ポストや石油収入の配分率など、一度利権化したものを平準化するのにはなかなか難しい。

天野 現地に住んでいた感覚とし

桑原徹郎さん
三菱商事株式会社
執行役員
エネルギー事業グループCEO補佐
2009〜11年、6回イラクに渡り、
新規事業の開拓を行う。

天野善夫さん
三菱商事株式会社
地球環境事業開発部門
新エネルギー・電力事業本部
アジア・太平洋事業ユニットマネージャー
1988〜91年、バグダッド駐在。

田中耕太郎
JICA中東・欧州部
中東第二課 課長
イラクなど中東6カ国を担当。
援助計画の立案・実施・管理を行う。

て、イラクは5〜10年もあれば自立すると信じています。イスラム教の宗派や民族の違いは昔からの問題で、国を一つにしていくにはサダム・フセインのような人がいないとダメだと独裁が美化されていた時代もありました。フセイン政権が倒れてからは、米軍がそれを担ってきましたが、まもなく撤退します。これから初めて真正面からこの問題に向き合っていくことになるのです。自分たちの国を自分たちでどうまとめていくか。それが今後のイラクを見る、一つの指標になるのではないのでしょうか。

田中 かつてのイラクは多くの日本人ビジネスマンが駐在できるほど安定していましたが、戦争はそれを一瞬にして奪ってしまいました。元の姿にできるだけ早く戻していくのがJICAの役割。それが企業活動の拡大の呼び水にもなると思っています。

イラクが日本に寄せる期待。日本人が残したこの「遺産」をどう生かしていくか、その分岐点に立っている今、民と官が連携して取り組んでいくことが重要だと思います。